

闇夜の芸術祭

Art Festa in the Dark

日本ベストミステリー選集 **30** Dark Festa
日本推理作家協会編



Best Mystery

生島治郎

逢坂剛

香納諒一

日下圭介

篠田節子

都筑道夫

伴野朗

中津文彦

新津きよみ

馳星周

東野圭吾

宮部みゆき

森村誠一

山田正紀

若竹七海



光文社文庫

日本ベストミステリー選集30

やみよ げいじゆつさい

闇夜の芸術祭

編者 にほんすいりきつかきょうかい
日本推理作家協会

2003年4月20日 初版1刷発行

発行者 八木沢一寿
印刷 慶昌堂印刷
製本 榎本製本

発行所 株式会社 光文社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8113 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Mystery Writers of Japan, Inc. 2003

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-73473-1 Printed in Japan

[R]本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

光文社文庫

日本ベストミステリー選集30

闇夜の芸術祭

ベスト・オブ・ベスト

『最新「珠玉推理」大全下』改題

日本推理作家協会編



光 文 社

一九九八年十月 カッパ・ノベルス（光文社）刊

『最新「ベスト・オブ・ベスト珠玉推理」大全』改題

目 次

離婚調査

危ない消火器

雨のなかの犬

忍び寄る人

野犬狩り

ランプの宿

お役所仕事

お菊の皿

頼まれた男

生島治郎いくしま じろう

逢坂剛おうさか ごう

香納諒一かのうりよう いち

日下圭介くさ けいすけ

篠田節子しのだ せつこ

都筑道夫つづき みちお

伴野朗とも の ろう

中津文彦なか つ ふみ ひこ

新津きよみにい つ

7

43

103

145

165

197

205

243

281

M

誘拐電話網

砂村新田
すなむらしんでん

余計な正義

さなぎ

白い顔

馳星周
はせ せいしゅう

東野圭吾
ひがしの けいご

宮部みゆき
みやべ

森村誠一
もりむら せいいち

山田正紀
やまだ まさき

若竹七海
わかたけ ななみ

解説

山前譲
やままえ ゆずる

496

483

463

431

405

383

315

離婚調査

生島治郎
いくしま じろう

生島治郎

一九三三年、中国・上海生まれ。早川書房勤務ののち、六四年に最初の長編『傷痕の街』を刊行。六七年、『追いつめる』で直木賞を受賞する。ハードボイルドや冒険小説の世界を代表する作家として多数の作品を発表。八九年より二期四年、日本推理作家協会理事長を務めた。私小説的な『片翼だけの天使』シリーズも話題を呼んだ。二〇〇三年に逝去。

「あなただって、離婚に関する調査はしない主義だったわね」と久我典子^{くがのりこ}が私の顔を覗きこむようにして訊いた。

彼女は刑事事件専門の弁護士であり、目下私とは親密な関係にある。

「まあ、そういうつもりでいる」

と私は答えた。

「なぜなの？」

と彼女はさらに訊ねた。

「お金にならないから？」

「経済的な理由ではないね」

と私は彼女をみつめ返した。

彼女の年齢は三十二歳、離婚歴も一度あるが、知的なセンスを備え、鼻柱は相当に強いものの、それは表情にあらわれてはいない。

やや痩せ気味の印象を与えるが、全く肉がついていないわけではなく、しかるべきところにきちんと肉のついた、なかなかのプロポーションの持主である。

眼鏡をかけているときは年相応に見え、眼鏡を外すと五つばかり若く見える。

今、彼女は眼鏡を外していて、二人はあるホテルのコーヒーションでランチを食べていた。

「多分、ぼくがかつて刑事だったから、民事は苦手と考えているんだろうね」

「でも、今、離婚の調査は増えているらしいわよ」

と彼女はスープをすすった。

「けっこうお金にもなるらしいし」

「だから、経済的な理由ではないと言っているだろう」

私は食後のコーヒーに手をつけた。

「きみが女だてらに刑事事件ばかり追いかけているようなもんさ」

「そう言われると一言もないわ」

と彼女は言った。

「どうも、刑事事件の方が荒っぽいけど、すつきりするのよ。民事は弁護士同士の取りひきが多くて、示談に持ってゆく腕が必要な。なんだか、すつきりしないわ」

「離婚もそうだよ」

私は煙草に火を点けた。

「男女のもつれを調査するわけで、いわば泥沼だ。そのあげくまずハッピーエンドはあり得ないわけだから仕事のし甲斐がない」

「でも、あなたにその離婚の調査を頼みたいの」

典子は訴えかけるように私を見た。

「依頼人はあたしの大学時代のクラスメイトなのよ」

「亭主の浮気をたしかめてくれとでも言うのかい」

私はうんざりしながら言った。

「そういうことなら、興信所にでも頼めばいいよ。安く効率的にやってくれる」

「彼女は離婚しようと考えているわけじゃないのよ」

典子はなおも訴えかける眼差しをつづけた。私はこういう眼に弱い。

「彼女——和田^{わだ}広子^{ひろこ}と言うんだけど——広子はある出版社の編集者と結婚して七年になるの。

旦那は和田直道^{なおみち}と言つて、年は三十八、けっこうやり手でその出版社ではエリートらしいわね。もつとも、出版社としては一流ではないらしいけど、二流の上というところらしいわ」

「三十二と三十八のカップルで、結婚七年めか」

と私は苦笑した。

「まさに、七年めの浮気というやつじゃないのか」

「それが浮気かどうかわからないのよ」

典子は眼を宙に浮かせた。

「彼女のカンでは彼は浮気をしていないと思つてゐるらしいの。しかし、土曜日になると必ず家に帰つてこなくなる。それがここ三カ月ばかりつづいてゐるの。彼は社用だと言つてゐるけど、彼女は信じられない」

「それなら、簡単なことじゃないか。どこに泊つてゐるか確かめればいい」

「それは確かめたのよ」

と彼女は身を前に乗り出した。

「彼は高輪^{たかぬわ}にあるホテル・ギャラクシイに泊つてゐる。そのことは彼も彼女に打ち明けたの。」

柳「完やなぎいつかんという作家を缶づめかんにしているのだと言うわけ」

「柳一完ねえ」

その名前は私も知っていた。時代小説を書いていて、仲々の売れっ子である。

「売れっ子作家ともなると、出版社はホテルへ缶づめにするわけか。優雅なもんだな」

「作家を缶づめにするのは、どの出版社もやっていることらしいわ」

と典子は言った。

「ただ、三カ月というのは長期すぎると広子は言うの。彼女も旦那と同じ出版社に勤めていて、社内結婚だから、その辺は詳しいわけよ」

「じゃあ、彼女も編集者だったわけだ」

と私はうなずいた。

「結婚したので辞めたわけ？」

「彼女の方は勤めをつづけたかったんだけど、同じ社じゃなにかとやりにくいからと彼が言ったんで辞めて専業主婦になったみたいだわ。ところが、結婚して七年になるのに、子供はできないし、ただ亭主を待っている生活に飽きたのかもしれないわね。その上、三カ月も土曜になると帰らなくなる。いらいらするのは当り前だわ」

「ふむ」

私は煙けむりをゆるゆると吐き出した。

「で、土曜日に亭主がなにをしているかつきとめたいわけか」

「お願いよ、相談に乗ってやって」

典子は手を伸ばし、私の腕をたたいた。

「あたしのために、例外をつくつてよ」

そういうわけで、和田広子は典子とともに翌日の午後三時に私の事務所にやってきた。

小柄ではあるが、顔立ちのはっきりした仲々の美人であった。濃紺のスーツに白のブラウスという姿で、主婦というよりキャリアウーマンという印象が強い。

やや気の強そうな感じは典子と共通していた。

「はじめまして、和田広子です」

落ち着いたてきばきした口ぶりで自己紹介をした。

「この度はごむりを申し上げて、申し訳ありません」

「いや、久我さんの紹介であれば断れませんよ」

私は典子を見やって苦笑した。

「お二人は同級生だそうですね」

「クラスメイトと言つても、同じ大学ということなの」

と典子は言った。

「同じ学年であたしは法学部、彼女は文学部の仏文。あたし、フランス文学が好きだから、仏文の読書会へ入って彼女と知り合い、仲良くなったの」

「ほう」

私は二人を見やった。

二人とも三十二歳で、同じように勝気で有能そうに見える。典子はバツイチだが、こういうタイプは主婦よりキャリアウーマンに向いていそうだった。

「ご亭主が三カ月間、土曜になると帰ってこられないということでしたな」

私は二人にソファをすすめながら言った。

「そして、泊っているホテルはわかつていると。ホテル・ギャラクシイでしたか？」

「そう。品川駅しながわの近くにあるホテルです」

と広子が大きな眼でじつと私を見据えるようにして言った。

「そこに柳さんを缶づめに行っているの、主人は帰れないのだと言うのです」

「でも、作家を缶づめにすることは良くあるんですよ」

二人並んで座ったソファの向い側のアームチェアに私は腰を下ろした。

「あなたも同じ出版社にいたから、その辺のことはおわかりのはずだ」

「ええ、作家を缶づめにせざるを得ないことはあります」

と広子はうなずいた。

「流行作家になると、何社もの仕事を受けていますから、自社の作品を優先して書いてもらいたい場合には、ホテルに缶づめにして、日を空けてもらうんです」

「だったら、出版社としてはふつうのことではありませんか？」

「でも、うちの社——つまり、白晶社はくしょうしゃのような一流の出版社では、とてもそんなゆとりはないはずなんです。一流の出版社でもあまりやりません。せいぜい永くて十日程度です。三カ月

は永すぎますわ」

「しかし、その三カ月間の土日だけと考えれば、二十四日になる」

「二十四日でもあり得ません」

と広子はきっぱりと断定した。

「それに、ふつう作家を缶づめにする場合は、担当編集者までホテルに泊りこむ必要はないのです。そんなことをしていたら経費がかさみます」

「あなたのご主人は土曜に泊って、日曜には帰ってくるわけですか？」

「ええ、日曜の夕方には帰って参ります」

「とすると、ご主人は一泊するだけだ。柳さんはどうしているんだろう？」

「柳さんは土日と泊って、月曜には自宅へ帰り、他社の仕事をするようです」

「すると、社は二人分のホテル代をこの三カ月間払いつづけているわけですね」

「それがおかしいのです。たとえば、土曜だけと土日だけとは言え、それだけの経費を社が払うわけがないんです」

「その点について、ご主人に訊いたことはありませんか」

「主人は柳さんは自分のホテル代を負担しているというのです。だから、社は自分の一泊分を負担すればいい。そうなると、月に四日分ですから、社も特別に払ってくれると言うんです。しかし、あたしは信用できません。なにかウラがあるような気がしてならないんです」

話が長くなると見え、典子はソファから立ち、キッチンへ勝手に入って、コーヒを淹れはじめた。その態度で、広子はわれわれの親密度を承知なのだなと思つた。